

機関番号：64401

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20820069

研究課題名（和文） 韓国・朝鮮における首都圏の両班とその文化的動態に関する人類学的研究

研究課題名（英文） An Anthropological Research of the Yangban in the Seoul Metropolitan Region, Korea and Their Cultural Dynamics

研究代表者

太田 心平 (OTA SHIMPEI)

国立民族学博物館・研究戦略センター・助教

研究者番号：40469622

研究成果の概要（和文）：

ソウル首都圏に伝統的な根拠地をもつ両班家門を事例に、朝鮮時代から現在にいたるまで、両班の威信がどのように確立されてきたのかを明らかにした。この家門が威信を確立するための条件は通史的に一貫しており、「血縁」「出世」「地縁」の三つの条件をそろえるということが、社会制度の変化にも関わらず連続しているこの家門の威信確立の根底的なモデルであると結論づけることが出来た。

研究成果の概要（英文）：

This research clarified how the prestige of yangban has been established since Yi Dynasty Era, verifying a case of scholar-bureaucrat family in their traditional home place in Seoul Metropolitan Region. The requirements for this family to establish their prestige has been consistent: consanguinity, success and knowledge. It is concluded that to complete the three requirements has been the fundamental model of the case-studied family to establish their prestige regardless of how the social institutions might shift.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,310,000	393,000	1,703,000
2009年度	1,160,000	348,000	1,508,000
総計	2,470,000	741,000	3,211,000

研究分野：社会文化人類学、北東アジア研究

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学、エリートネス、旧慣調査、正統性、伝統、士族層、威信

## 1. 研究開始当初の背景

今村軻が行なった1900年前後の先駆的研究以降、韓国・朝鮮地域研究では両班と呼ばれる特権的な家門の人びとが韓国・朝鮮の伝統的かつ代表的な存在とされ、その文化的な特徴が盛んに研究されてきた。なお、人類学的な両班研究で研究対象とされたのは、地方社会に根差した(旧)在地士族層のみであった。そうした研究では、両班が特権的な立場

にある理由が、朝鮮時代に科挙に合格した祖先を持ち、地方社会に集住する親族互助組織をもつからという先天的な要因でのみ理解されてきた。また、無職であることを正当視する傾向が強かった。他方で、現代の韓国人が朱子学や上流社会での交友を、職業的なことよりも好んで実践することで両班のイメージを体現し、先天的な条件とは無関係に社会的な威信を獲得しているという現象についても、少なからず先行研究がある。つまり、

先行研究において両班の威信は、先天的条件にのみ起因すると考えられる傾向と、現代では後天的条件で獲得可能だと考えられる傾向の、相いれない二種類が並存してきたこととなる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、以前に人類学的な研究対象とされたことがなかった首都圏の両班、つまり(旧)在京士族層の民族誌を、特にその威信獲得の条件に着目して作成することで、各分野の研究に貢献することにある。

- (1) 朝鮮時代から現代にかけての(旧)在京士族層の通史的な文化史を明らかにすることで、史的な韓国・朝鮮研究に貢献する。
- (2) そうして先行研究の空白地帯を埋めることで、両班の文化的特徴を総合的に解明し、両班研究に貢献する。
- (3) その総合的な解明によって、先行研究における二種類の相いれない学説を止揚しうる根底的な威信獲得モデルを明らかにすることで、人類学における権威および権力の研究に貢献する。

## 3. 研究の方法

研究の方法は三つあった。

- (1) 朝鮮時代の在京士族層や近代以降の(旧)在京士族層の実情と、それをとりまく状況を明らかにする文献研究。特に、事例とする家門に関する情報を『朝鮮王朝実録』をはじめとする文献から抽出し、整理・分析した。
- (2) 事例とする家門の末裔や、それをとりまく人びとに対するフィールドワーク。特に、ラポールの形成を経た参与観察法およびインタビュー調査法という人類学的方法をとった。
- (3) 先行研究を行ってきた日韓の有識者たちとの意見交換。

## 4. 研究成果

(1) 朝鮮時代から日本植民地期まで、事例とした(旧)在京士族層の家門は、官僚、特に中央高級官僚としての職業を代々もち、そのため政治経済的な優位や社会文化的な特徴を保つことが出来たということがわかった。より具体的にいえば、この家門の朝鮮時代の男子たちは、夭逝した者を除くと56%近くが生

前に何らかの職位について秩禄を受けており、うち半数近くが中央高級官僚だったことがわかった。この結果は、先行研究で論じられてきたような無職の士族層の文化史と決定的に異なる点であり、士族層に対する認識を改める一助となるものであった。

そして、この家門にとって、こうした管理としての出世の足がかりとなったのが、知識だったといえた。この家門の男子たちにとって朱子学とは、たんなる嗜好物ではなかった。朝鮮時代の彼らは38%以上の確率で科挙の文科に及第していることがわかり、人類学的な両班研究の前提を揺るがす結果が出た。

もちろん、こうした出世や知識と相乗的に働いたのが、血統の優位や親族の互助関係といった血縁である。朝鮮王朝の官僚登用制度は既存の官僚の血縁者を優遇するものであったし、朱子学を学ぶ場も血縁により左右されるものだったからである。

これらの分析と論考により、これまで両班についての研究で両班の威信の条件として論じられてきた血縁以外にも、家門の構成員たちの出世や、社会的な発言権を確保するだけの知識という後天的な条件が、首都圏の両班の威信には不可欠な条件であり、この三つの条件は相乗的に士族層に威信をもたらしていたことが、明確になった。

なお、ここまで先行研究と異なる結果を本研究にもたらした根本的な要因として、都に近い場所に根拠地を築いたという、本研究が研究対象とした家門の地政学的な特徴を挙げることができる。この家門は、出世と知識を王朝から認められ、都の近くに私園を与えられたことがわかった。そこを血縁の拠り所とすることによって、末裔が生活と仕事を両立できる環境を整え、出世の再生産を行うことが出来たと指摘できた。また、都の近くのその他の威信高い家門とも交流し、知識の獲得と再生産を有利にしていたともいえた。

(2) 近代以降、事例とした家門は、官僚登用制度の変化により、首都圏の両班家門が徐々に官僚を輩出できなくなっていったことがわかった。日本からの外圧を受け、科挙制度が崩壊した韓国・朝鮮において、在来の威信構築モデルによる出世は不可能になったのである。その反面、職業は多様化し、必ずしも官僚にならなくても、給与を得て生計を立てていくことが可能になった。結果として、この家門の男子は、王朝の官僚から植民地政府の官僚へ、独立国家の国家公務員から地方公務員へ、そして会社員へと、段階的に職業を変え、中央政権がもたらす威信から遠ざか

っていったことが明らかとなった。

また、朝鮮時代に一体だった官僚と学者とが、近代以降、区別されるようになった。同時に、社会的に影響をもつ知識が、朱子学から近代科学へと変わった。こうした社会制度の変化により、従来の威信モデルで重要な要因となっていた朱子学による知識の獲得は、近代以降の社会で重要でなくなったのである。この家門は、徐々に官僚家門ではなくなったばかりか、学者家門になることもなかった。このことで、従来にもっていた社会的な発言権を、近代科学の権威者たる学者たちに奪われていった様相も明らかになった。

結果として、近代以前の威信の三つの条件のうち、出世の条件と知識の条件は研究者にも当事者にも重要でなくなり、血縁の条件のみが重視されるようになったわけである。結果的には、これまで両班研究の前提となってきた血縁のみを重視するという立場が、実際に正しいかのような状況になったといえよう。しかし、上記のような歴史的背景を加味すれば、この立場に再考の必要があるということは明確だといえた。

(3) 現在の旧士族層の状況については、少なからぬ家門が、新たな組織を作って威信の獲得や維持に勤めていることが明らかとなった。その組織は、財団などの形態をとり、家門の長である宗孫を筆頭にしながらも、家門外の学者や官僚を家門の顧問などとして招聘している。

このことは、近代以降に家門から輩出できなくなった官僚と学者を、家門を中心とした新たな組織に取り込むことを意味している。血縁によって威信を保持できている家門内の人びとが、官僚として出世した人びとと、知識を口承された学者とを自己の組織に取り込んでいるといえる。出世と知識という近代以降に足りなくなった両班家門の威信の条件は、こうして家門の外から、いわば「外注」されているのである。

これにより、現在でも両班家門が出世の条件や知識の条件を自己の威信の確立に利用していることを示すことが出来た。この家門が威信を確立するための条件は、朝鮮時代から現在にいたるまで通史的に一貫しており、「血縁」「出世」「地縁」の三つの条件をそろえるということが、社会制度の変化に抗して連続しているこの家門の威信確立の根底的なモデルであると結論づけることが出来た。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔図書〕(計2件)

- ① OTA Shimpei, 『양반의 탄생』(兩班の誕生)、印刷中、228
- ② OTA Shimpei, “‘Doing Anthropology’ of Korea in Contemporary Japan”, 『50th Anniversary International Meeting of the Korean Society for Cultural Anthropology “Culture and Anthropology in the Age of Super-Competition”』、2008、7

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 太田心平, 血と職と——韓国・朝鮮の士族アイデンティティとその近代的変容について、国立民族学博物館研究報告、査読有、34巻2号、2009、pp. 229-270

〔学会発表〕(計2件)

- ① 太田心平, 女性化した男性たち——ソウル近郊の士族女性たちが見た近代の村落秩序とエリート像、国立民族学博物館平成20年度機関研究「東アジアの村落社会における「近代」の再考」国際ワークショップ「東アジアの村落社会が見た「近代」——地域の有力者層への着目から」、20090322、国立民族学博物館
- ② OTA Shimpei, “‘Doing Anthropology’ of Korea in Contemporary Japan”, 50th Anniversary International Meeting of the Korean Society for Cultural Anthropology “Culture and Anthropology in the Age of Super-Competition”, 20081114, Seoul National University

〔エッセイ〕(計4件)

- ① 太田心平, 伝統のなかで眠れる幸せ、毎日新聞(関西版)2010年8月11日、2010、1
- ② 太田心平, エリートは語る事ができないか、月刊みんぱく、34巻7号、2010、2
- ③ 太田心平, 酒宴で開く別の時間への扉、毎日新聞(関西版)2010年2月10日、2010、1
- ④ 太田心平, 両班異伝——韓国・朝鮮の創られた旧慣と旧在京士族層の歴史的現在、民博通信、121号、2

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

太田 心平 (OTA SHIMPEI)  
国立民族学博物館・研究戦略センター  
・助教  
研究者番号：40469622

